『男の顔は履歴書』、履歴書にみる人生の生き様、結晶
-----渡辺淳一の日経「私の履歴書」から加清準を追想---

本誌にエッセイ「出逢いと人生」などを連載
加清ワールドを綴る

『男は四十になったら自分の顔に責任を持て』といったのが第16代アメリカ合衆国大統領エイブラハム・リンカーンなら『男の顔は履歴書』といったのは大宅壮一。数多い哀歓を彫り込んだ年輪から滲み出てくる表情の豊かさ、男の人生の生き様、結晶を表すという意味合いである。年齢を重ねた男は、顔や服装、立ち居振る舞い、会話でものの5分もあればある程度の判別がつくという。ちなみに『女の顔は請求書』といったのは大宅壮一の弟子草柳大蔵である。

日本経済新聞朝刊最終面の文化欄に掲載されている「私の履歴書」は55年以上も継続する人気コラムだが、新年1月は北海道が生んだ直木賞作家の渡辺淳一が連載された。なかでも前半に掲載された『女生徒からの手紙』『純子の誘惑』『雪像を染めた血』『図書館での逢瀬』『阿寒湖畔の死』のコーナーに大きな関心と懐かしさを覚えた。内容は天才少女画家として有名であった加清純子との悲恋を描写しているが、純子は最後に阿寒湖畔で失踪し死んだ。純子をモデルとした『阿寒に果つ』(角川文庫)は映画化もされた加清純子への鎮魂の文学作品だ。

本誌に長くコラムを連載していただいた加清準(2007年3月没)の妹が純子。だから、加清準が懐かしい。

加清準は札幌トヨペット副社長、学校法人希望学園理事長などを歴任した経営者、教育者。多くの人脈を持ち他人に面倒見の良い人格者であった。本誌には「出逢いと人生」「私とディーラー人生」というタイトルで数多くの名訓の文章を綴った。なかに「履歴書」という題のコラムもある。

「…青木商事の八柳鉄郎専務は、マンモスキャバレー『エンペラー』の責任者として、数多くのホステス志望の女性の面接を担当しているが、彼は僕にこう言った。『貴方は幸せですよ。真正な履歴書を見て判断できるのですから。ホステスの履歴書で真正なのは名前と現住所位です』

聞いて僕は愕然とした。真正を書けない不運な履歴、採用されるために年齢も学歴も詐称しなければならぬ境遇、偶々、病気で死亡しても住所が虚偽のため親許へ連絡とれず無縁仏とならざるを得ない彼女たちの履歴書を『詐称だ』『偽造だ』と咎めることが、いいのか悪いのか僕は迷う。」

人生の一面しか見ていない者には『履歴書』はその読み方を一面しか教えないものなのだろうかと自問自答する。

『山より高き父の恩・海より深き母の恩』母の愛は無限

さらに、「大きな愛」では、

「小学校に入り、まず教えられたのは『山より高き父の恩・海より深き母の恩』という言葉。目を閉じると既にこの世にいない父母の面影が浮かぶ。時には厳しい父の顔が出てきても、すぐ横に母の優しい顔が出て打ち消す。確かに父は子を『あるべきものとして愛し導く』のに対し、母は子を『あるものとして愛し包む』ものである。父の存在は思想の形成に大きな影響を与えるが、母の存在は子の生存そのものに密着していると言っていい。

母の愛・これは無限である。母の愛・これは決して代償を求めない。命に換えても『ただ』なのだ。人は時に、この『ただ』のものの尊さを忘れる。そういえば河野進(詩人)は『ただ』という詩を作っている。

もっとも大切なものは
みな　ただ
太陽の光　野や山の緑
雨や川の水　朝夕の挨拶
神への祈り　母の愛

人は、皆、母がいつまでも健在で、しかも純粋なものであってほしいと念う。

加清の文には人間の機微溢れる人生訓の内容、文面が多い。なお、加清準が本誌に連載したエッセイ「出逢いと人生」は加清の友人である原田悟男の手で没後自費出版された。

また、日経の「私の履歴書」連載の経済人295人を中心にテーマごとにまとめたユニークな書物「ビジネスは『私の履歴書』が教えてくれた」(吉田勝昭著・中央公論事業出版)がある。

今までの日経「私の履歴書」登場者には自動車関連では、豊田英二(トヨタ自動車会長)、石田退三(トヨタ自工社長)神谷正太郎(トヨタ自動車販売社長)、加藤誠之(トヨタ自動車販売社長)、本田宗一郎(本田技研工業社長)、川又克二(日産自動車社長)、石原俊(日産自動車相談役)、松田恒次(東洋工業社長)、舘豊夫(三菱自動車相談役)、梁瀬次郎(梁瀬社長)、ルイ・シュバイツアー(ルノー会長)などがいる。(「ビジネスは…」)

「一期一会の出逢いが運命的な『めぐり逢い』になることもあるし、書物を通して畏敬の念をもった故人の出会いもある。魅力のある人間との出逢いを求めて歩くのが、価値を求めての人生行路に違いない」(加清準「出逢いと人生」)。(文中敬称略)

編集長・編集主幹　佐藤　公(たかし)